

[原著論文]

保険薬局での継続可能なブラウンバッグ運動の試み
- 調査票を用いた薬剤師の介入が必要な患者の選択 -

三木有咲¹⁾, 波多江崇^{1)*}, 長谷川由佳¹⁾, 辻華子¹⁾, 上野隼平¹⁾, 中川素子²⁾,
米谷理沙²⁾, 仲村佳奈²⁾, 田村直之²⁾, 園田薫²⁾, 井上伸子²⁾, 手塚尚子²⁾,
山本章仁²⁾, 佐川みはる²⁾, 島川大見²⁾, 竹下治範¹⁾, 田内義彦¹⁾, 濱口常男¹⁾

1) 神戸薬科大学 薬学臨床教育センター, 2) 中川調剤薬局

^{1)*} 〒658-8558 兵庫県神戸市東灘区本山北町4丁目19-1

²⁾ 〒675-0063 兵庫県加古川市加古川町平野537-2

要旨 保険薬局での継続可能なブラウンバッグ運動を構築することを目的として、患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などの点検が必要と判断される患者を抽出する調査票を作成し、聞き取り調査を実施した。今回の調査で、薬剤師による介入が必要と判断された患者は、他院から薬が処方されている患者で約6割、市販薬を併用している患者で約7割であったのに対し、健康補助食品を併用している患者では、ほぼ全員という結果になった。また、全体の約7割の患者が薬剤師による介入が必要との判断に至った。薬剤師は患者の来局時に、積極的に健康補助食品の使用の有無を確認し、その適切な使用方法や、健康におよぼす可能性についての情報提供を行うと共に、必要に応じて、患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などの点検など、よりきめ細やかな対応を行うことで、医療用医薬品および市販薬などの適正使用に寄与することができると思われた。

キーワード : ブラウンバッグ運動, 調査票, 保険薬局

連絡先 : 神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

波多江崇

〒658-8558 兵庫県神戸市東灘区本山北町4丁目19-1

Tel : 078-441-7836 Fax : 078-441-7837

E-mail: *t-hatae@kobepharm-u.ac.jp

緒 言

近年、国民の健康意識の高まりから、セルフメディケーションの重要性が認識され、サプリメント・健康食品（健康補助食品）や市販薬を自身の判断で使用している一般消費者が増加している^{1,2)}。しかし、健康補助食品による健康被害に関する報告³⁾、また、市販薬・健康補助食品（市販薬など）と医療用医薬品との併用による治療効果への重大な影響をおよぼしたとの報告⁴⁾があることから、医療機関で治療中の患者が市販薬などを適切に使用しているかどうかは疑問である。以上のような事故を未然に防ぐために、薬剤師は患者が所有している医療用医薬品および市販薬などの使用実態を把握し、必要に応じて市販薬などの正しい知識を患者に伝え、適正使用を促進するための活動を実行する必要がある。

その方法の1つにブラウンバッグ運動がある。ブラウンバッグ運動とは、1982年にアメリカで始まったもので、患者が日常的に服用している医療用医薬品および市販薬などを薬局に持参してもらい、薬剤師がそれらの副作用や相互作用などの問題を点検する運動である⁶⁾。本邦では、主に高齢者を対象に、複数の薬剤師会、薬局チェーンでブラウンバッグ運動が行われ、その結果が学会で発表されている⁸⁻¹⁰⁾。ブラウンバッグ運動を実施するためには、患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などを薬局に持参する必要がある。また、薬剤師はそれらを点検する必要がある。そのため、患者・薬剤師双方の負担が大きく、すべての患者を対象とするブラウンバッグ運動を定着させることは難しいのではないかと考えられた。

そこで、今回われわれは、保険薬局での継続可能なブラウンバッグ運動を構築することを目的として、

患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などの点検が必要と判断される患者を抽出する調査票を作成し、その調査票を用いて聞き取り調査を実施した。

方 法

1. 調査対象

平成25年9月に、中川調剤薬局の3店舗に処方せんを持参した患者のうち、過去1年以上当該店舗に定期的に来局し、生活習慣病に対する治療薬を服用している患者に調査研究の趣旨説明を行い、同意が得られた患者を対象とした。また、患者本人ではなく、家族が処方せんを持参した場合は、家族に調査研究の趣旨説明を行い、同意が得られた場合に、患者の代理として調査対象とした。なお、患者のうち、未成年者、医師・薬剤師・看護師等の医療従事者、製薬会社の医薬情報担当者、医薬品卸会社の医薬品卸販売担当者などの医薬関係者を対象から除外した。

2. 調査方法

年齢、性別などの基本的な情報および薬剤服用歴管理指導料の算定要件である他科受診の有無等の36項目からなる調査票を用いて、薬剤師による聞き取り調査を行った（図1）。回答が得られた111名（平均年齢±標準偏差：70.74±10.12歳、男性：46名、女性：62名、未回答：3名）を対象とした。なお、患者および患者の家族を対象とした聞き取り調査のため、患者が回答を控えた項目については、未回答として処理した。

保険薬局におけるブラウンバック運動の試み

中川調剤薬局〇〇店 通し番号 番

兵庫県内の保険薬局の患者における併用薬および健康食品等の摂取状況調査（記入用紙）

年齢 Q1. 年齢を聞かせていただいてもよろしいでしょうか 回答 歳

性別 Q2. 性別を教えてください 回答 1. 男性 2. 女性

生活習慣関連の薬剤（一般名）（薬歴で調べる）

Q3. 高血圧、糖尿病、痛風、脂質異常症、狭心症、心筋梗塞、COPD の薬剤は何を飲まれていますか（薬歴で調べる）

回答

高血圧：（ある・なし）薬剤名

糖尿病：（ある・なし）薬剤名

痛風：（ある・なし）薬剤名

脂質異常症：（ある・なし）薬剤名

狭心症：（ある・なし）薬剤名

心筋梗塞：（ある・なし）薬剤名

COPD：（ある・なし）薬剤名

他科受診の有無とかかりつけの病院の数とその診療科と主治医への報告の有無

Q4. 他の病院にかかっていますか（かかりつけの科の数とその診療科の確認も含む）

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（かかりつけの科の数と診療科名）

他科から処方された医療用医薬品の併用薬の有無と主治医への報告の有無

Q5. 他の病院から出された薬はありますか（併用薬の確認）

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（併用薬名がわかる場合、販売名または一般名または薬効分類：痛み止め等）

他科受診の有無とかかりつけの病院の数とその診療科と主治医への報告の有無

Q6. すべてのかかりつけの医師に他の病院にかかっていることを伝えていますか

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（特別なコメントがある場合）

他科から処方された医療用医薬品の併用薬の有無と主治医への報告の有無

Q7. すべてのかかりつけの医師に他の病院でもらった薬について伝えていますか

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（特別なコメントがある場合）

医療用医薬品間の相互作用の知識の有無

Q8. 病院でもらう薬同士で影響しあう可能性があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

常備薬の有無

Q9. 自宅に常備している市販薬はありますか

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（特別なコメントがある場合）

図 1A アンケート票

保険薬局におけるブラウンバッグ運動の試み

中川調剤薬局〇〇店 通し番号 番

日常的に使用している OTC 医薬品の有無と主治医への報告の有無

Q10. 現在使われている市販の薬はありますか 回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（市販薬名がわかる場合、販売名または一般名または薬効分類：痛み止め等）

OTC 医薬品、サプリメント・健康食品の使用目的

Q11. どうして市販薬を使用しているのですか

回答 1. 処方薬で治療効果を実感できない 2. 病気の予防 3. 症状の改善

4. 病院に行く時間がない 5. なんとなく 6. その他

自由記述（特別なコメントがある場合）

日常的に使用している OTC 医薬品の有無と主治医への報告の有無

Q12. すべてのかかりつけの医師に市販の薬を使用していることについて伝えてありますか

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（特別なコメントがある場合）

日常的に使用しているサプリメント・健康食品の有無と主治医への報告の有無

Q13. 現在使われているサプリメントはありますか 回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（サプリメントの販売名または成分名）

OTC 医薬品、サプリメント・健康食品の使用目的

Q14. どうしてサプリメントを使用しているのですか

回答 1. 処方薬で治療効果を実感できない 2. 病気の予防 3. 症状の改善

4. 病院に行く時間がない 5. なんとなく 6. その他

自由記述（その他を具体的に記述）

日常的に使用しているサプリメント・健康食品の有無と主治医への報告の有無

Q15. すべてのかかりつけの医師にサプリメントを使用していることを伝えてありますか

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（特別なコメントがある場合）

日常的に使用しているサプリメント・健康食品の有無と主治医への報告の有無

Q16. 現在使われている健康食品はありますか 回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（健康食品の販売名または成分名）

OTC 医薬品、サプリメント・健康食品の使用目的

Q17. どうして健康食品を使用しているのですか

回答 1. 処方薬で治療効果を実感できない 2. 病気の予防 3. 症状の改善

4. 病院に行く時間がない 5. なんとなく 6. その他

自由記述（その他を具体的に記述）

図 1B アンケート票

保険薬局におけるブラウンバッグ運動の試み

中川調剤薬局〇〇店 通し番号 番

日常的に使用しているサプリメント・健康食品の有無と主治医への報告の有無

Q18. すべてのかかりつけの医師に健康食品を使用していることを伝えてありますか

回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない

自由記述（特別なコメントがある場合）

医薬品、健康食品、サプリメントに関する情報源

Q19. 薬についてどこからの情報を参考にしますか

回答 1. 薬剤師 2. 薬剤師以外の医療従事者 3. テレビ 4. ラジオ 5. ネット

6. 新聞・雑誌など 7. その他

自由記述（その他を具体的に記述）

医療用医薬品－OTC 医薬品間の相互作用の知識の有無

Q20. 病院でもらう薬と市販の薬で影響しあう可能性があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

OTC 医薬品、健康食品、サプリメントで副作用発現の可能性の知識の有無

Q21. 市販の薬で副作用が出る可能性があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

医薬品、健康食品、サプリメントの保管方法の知識の有無

Q22. 市販の薬に保管方法があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

医薬品、健康食品、サプリメントに関する情報源

Q23. サプリメントについてどこからの情報を参考にしますか

回答 1. 薬剤師 2. 薬剤師以外の医療従事者 3. テレビ 4. ラジオ 5. ネット

6. 新聞・雑誌など 7. その他

自由記述（その他を具体的に記述）

医療用医薬品－サプリメント・健康食品間の相互作用の知識の有無

Q24. 病院でもらう薬とサプリメントで影響しあう可能性があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

OTC 医薬品、健康食品、サプリメントで副作用発現の可能性の知識の有無

Q25. サプリメントで副作用が出る可能性があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

医薬品、健康食品、サプリメントの保管方法の知識の有無

Q26. サプリメントに保管方法があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

医薬品、健康食品、サプリメントに関する情報源

Q27. 健康食品についてどこからの情報を参考にしますか

回答 1. 薬剤師 2. 薬剤師以外の医療従事者 3. テレビ 4. ラジオ 5. ネット

6. 新聞・雑誌など 7. その他

自由記述（その他を具体的に記述）

医療用医薬品－サプリメント・健康食品間の相互作用の知識の有無

Q28. 病院でもらう薬と健康食品で影響しあう可能性があることを知っていますか

回答 1. はい 2. いいえ

図 1C アンケート票

保険薬局におけるブラウンバッグ運動の試み

中川調剤薬局〇〇店	通し番号	番
OTC 医薬品、健康食品、サプリメントで副作用発現の可能性の知識の有無		
Q29. 健康食品で副作用が出る可能性があることを知っていますか		回答 1. はい 2. いいえ
医薬品、健康食品、サプリメントの保管方法の知識の有無		
Q30. 健康食品に保管方法があることを知っていますか		回答 1. はい 2. いいえ
おくすり手帳の携帯		
Q31. おくすり手帳を持ち歩いていますか		回答 1. いつも 2. 受診時のみ 3. いいえ
健康食品、サプリメントのお薬手帳への記載の有無		
Q32. お薬手帳に健康食品、サプリメントについて記入していますか		回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない
自由記述（特別なコメントがある場合）		
健康食品、サプリメント購入時の相談の有無		
Q33. 健康食品、サプリメント購入時にかかりつけ薬局の薬剤師に相談していますか		回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない
自由記述（特別なコメントがある場合）		
Q34. 健康食品、サプリメント購入時にドラッグストア等にいる薬剤師等（登録販売者を含む）に相談していますか		回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない
自由記述（特別なコメントがある場合）		
健康食品、サプリメントと医療用医薬品との相互作用を指摘された経験の有無		
Q35. 病院でもらう薬との飲み合わせの問題点について実際に指摘されたことはありますか		回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない
自由記述（特別なコメントがある場合）		
健康食品、サプリメントの必要性について薬剤師から指摘された経験の有無		
Q36. 健康食品、サプリメントの必要性について薬剤師から指摘されたことはありますか		回答 1. はい 2. いいえ 3. わからない
自由記述（特別なコメントがある場合）		

図 1D アンケート票

朝比奈ら¹¹⁾は、一部の患者は「健康食品」の範囲、安全性について医療従事者と認識が異なること、また、そのような患者では薬剤師とのコミュニケーションの齟齬が生じている可能性が高いと報告している。このことから、認識の差異による聞き取り漏れを防ぐ目的で、「健康食品」に関する聞き取り項目は、「健康食品」と表現した項目と、「サプリメント」と表現した項目の2つを用意した。集計・解析時には、健康食品とサプリメントの項目を統合して、健康補助食品と表現した。つまり、聞き取り時は、「Q24. 病院でもらう薬とサプリメントで影響しあう可能性があることを知っていますか」と「Q28. 病院でもらう薬と健康食品で影響しあう可能性があることを知っていますか」とし、集計・解析時は、これらを統合して「病院でもらう薬と健康補助食品で影響しあう可能性があることを知っていますか」とした。また、「Q25. サプリメントで副作用が出る可能性があることを知っていますか」と「Q29. 健康食品で副作用が出る可能性があることを知っていますか」についても同様に「健康補助食品で副作用が出る可能性があることを知っていますか」とした。

3. 薬剤師による介入が必要と判断される患者の判定

患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などの点検が必要と判断される患者を、以下の3つのいずれかに該当する患者とした。

3-1. 「他の病院から薬が出ている」に「はい」と回答した患者のうち、「すべてのかかりつけ医に他の病院への通院を伝えている」、「すべてのかかりつけ医に他の病院でもらった薬を伝えている」、「病院でもらう薬同士の相互作用の可能性について知っている」のいずれかに「はい」以外の回答をした患者とした。

3-2. 「現在使用している市販薬がある」に「はい」と回答した患者のうち、「すべてのかかりつけ医に市販薬の使用を伝えている」、「病院でもらう薬と市販薬の相互作用の可能性について知っている」、「市販薬で副作用が出る可能性があることを知っている」

のいずれかに「はい」以外の回答をした患者とした。

3-3. 「現在使用している健康補助食品がある」に「はい」と回答した患者のうち、「すべてのかかりつけ医に健康補助食品の使用を伝えている」、「病院でもらう薬と健康補助食品の相互作用の可能性について知っている」、「健康補助食品で副作用が出る可能性について知っている」のいずれかに「はい」以外の回答をした患者とした。

なお、本調査は神戸薬科大学倫理委員会の承認を受け実施した。

結 果

1. 他院から薬が処方されている患者とその背景

今回の調査より、「他の病院から薬が出ている」について「はい」と回答した患者は約4割であった(図2)。そのうち、「すべてのかかりつけ医に他の病院への通院を伝えている」について「はい」以外の回答をした患者は約4割、「すべてのかかりつけ医に他の病院でもらった薬を伝えている」について「はい」以外の回答をした患者は約5割、「病院でもらう薬同士の相互作用の可能性について知っている」について「はい」以外の回答をした患者は約2割であった(図3)。また、「他の病院から薬が出ている」について「はい」と回答した46名のうち、「すべてのかかりつけ医に他の病院への通院を伝えている」、「すべてのかかりつけ医に他の病院でもらった薬を伝えている」、「病院でもらう薬同士の相互作用の可能性について知っている」のいずれかに、「はい」以外の回答をした患者は約6割であった。(結果省略)

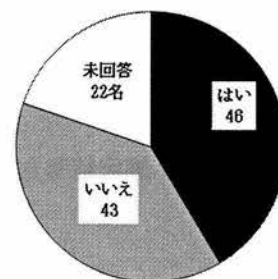


図2 他の病院から薬が出ている

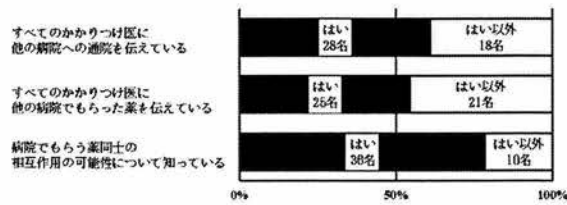


図3 他院から薬が処方されている患者の背景

2. 市販薬を併用している患者とその背景

「現在使用している市販薬がある」について「はい」と回答した患者は約2割であった（図4）。そのうち、「すべてのかかりつけ医に市販薬の使用を伝えている」について「はい」以外の回答をした患者は約6割であり、「病院でもらう薬と市販薬の相互作用の可能性について知っている」について「はい」以外の回答をした患者は約3割、「市販薬で副作用が出る可能性があることを知っている」について「はい」以外の回答をした患者は約3割であった（図5）。また、「現在使用している市販薬がある」について「はい」と回答した患者27名のうち、「すべてのかかりつけ医に市販薬の使用を伝えている」、「病院でもらう薬と市販薬の相互作用の可能性について知っている」、「市販の薬で副作用が出る可能性があることを知っている」のいずれかに、「はい」以外の回答をした患者は約7割であった。（結果省略）

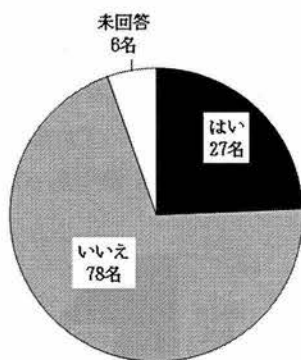


図4 現在使用している健康補助食品がある

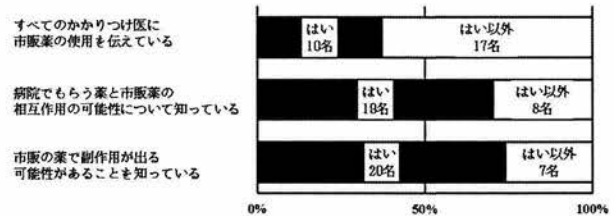


図5 市販薬を併用している患者の背景

3. 健康補助食品を併用している患者とその背景

「現在使用している健康補助食品がある」について「はい」と回答した患者は約5割であった（図6）。そのうち、「すべてのかかりつけ医に健康補助食品の使用を伝えている」について「はい」以外の回答をした患者は約9割、「病院でもらう薬と健康補助食品の相互作用の可能性について知っている」について「はい」以外の回答をした患者は約5割、「健康補助食品で副作用が出る可能性について知っている」について「はい」以外の回答をした患者は約4割であった（図7）。また、「現在使用している健康補助食品がある」について「はい」と回答した患者60名のうち、「すべてのかかりつけ医に健康補助食品の使用を伝えている」、「病院でもらう薬と健康補助食品の相互作用の可能性について知っている」、「健康補助食品で副作用が出る可能性について知っている」のいずれかに、「はい」以外の回答をした患者はほぼ全員であった。（結果省略）

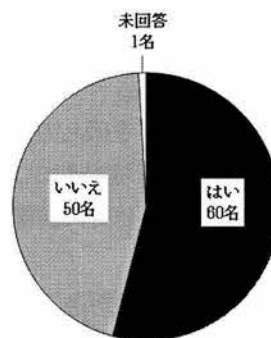


図6 現在使用している健康補助食品がある

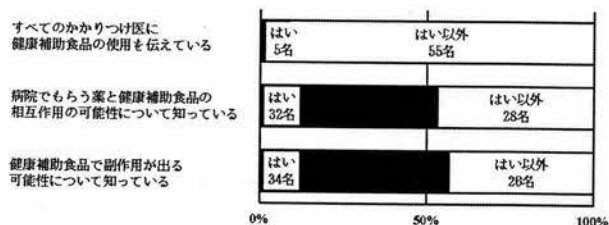


図7 健康補助食品を併用している患者の背景

4. 薬剤師による介入が必要と判断される患者

「他の病院から薬が出ている」、「現在使用している市販薬がある」、「現在使用している健康補助食品がある」のいずれかについて「はい」と回答した患者は約8割であった（図8）。そのうち、介入が必要と判断された患者は、約9割であった（図9）。



図8 「他の病院から薬が出ている」
「現在使っている市販薬がある」
「現在使用している健康補助食品がある」
のいずれかに該当する患者

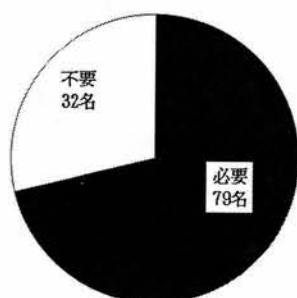


図9 薬剤師の介入が必要な患者

考 察

今回、保険薬局での継続可能なブラウンバック運動を構築することを目的として、患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などの点検が必要と判断される患者を抽出する調査票を作成し、その調査票を用いて聞き取り調査を実施した。

その結果、他の病院から薬が出ている患者は全体の約4割であった。このことは、60歳以上の患者を対象とした調査において、全患者の41%が同時に他科を受診しており、そのうちの81%がその科でも投薬されていたとの報告¹²⁾とほぼ一致していた。また、他の病院から薬が出ている患者のうち、約8割が医療用医薬品同士の相互作用の可能性について知っていた。しかし、医師に他の病院への通院を伝えている患者は約6割、医師に他の病院でもらった薬を伝えている患者は約5割であったことから、半数近い患者が、医師に他の病院への受診や薬が処方されていることを伝えていなかった。

現在使用している市販薬がある患者は約2割であった。また、医師に伝えることなく、市販薬を使用している患者は市販薬を使用しているほぼすべての患者であった。このことは、主治医の投薬以外に21%の患者が主治医に断りなく一般用医薬品を服用していたとの報告¹²⁾とほぼ一致していた。

現在使用している健康補助食品がある患者は約半数であった。このことは調剤併設ドラッグストアに処方せんを持参した患者を対象としたインタビュー形式の調査により、健康食品を現在摂取中の患者は35%であったとの報告¹³⁾より多かった。朝比奈ら¹⁴⁾は、一部の患者は「健康食品」の範囲、安全性について医療従事者と認識が異なること、また、そのような患者では薬剤師とのコミュニケーションの齟齬が生じている可能性が高いと報告している。本間ら¹³⁾は、「健康食品」としか表現していなかったのに対し、われわれは、聞き取り漏れを防ぐ目的で、「健康食品」と表現した項目と、「サプリメント」と表現した項目の2つを用意し、統合したためではな

いかと思われた。また、今回、現在使用している健康補助食品がある患者のうち、医師に健康補助食品の使用を伝えているのは1割に満たなかった。このことは、健康食品の購入について医師や薬剤師に相談をする患者はほぼいないという報告¹⁴⁾と一致するものであった。さらに、病院でもらう薬と健康補助食品の相互作用の可能性および健康補助食品で副作用が出る可能性について知っている患者は約半数しかいなかった。

今回の調査で、薬剤師による介入が必要と判断された患者は、他院から薬が処方されている患者で約6割、市販薬を併用している患者で約7割であったのに対し、健康補助食品を併用している患者では、ほぼ全員という結果になった。また、全患者の約7割が薬剤師による介入が必要な結果となった。このことから、医療用医薬品同士や医療用医薬品と市販薬の相互作用についての知識を持っていない患者に比べ、医療用医薬品と健康補助食品の相互作用についての知識を持っていない患者が多いことが明らかとなった。また、医療用医薬品や市販薬の副作用の知識を持っていない患者に比べ、健康補助食品の副作用の知識を持っていない患者も多いことが明らかとなった。医療用医薬品と健康補助食品との相互作用や健康補助食品の副作用など、健康補助食品の適正使用に関する知識を持たない患者が多かった要因として、健康補助食品は医療用医薬品や市販薬に比べ、薬剤師が患者に相互作用や副作用の情報を適切に伝えていないことが考えられる。濃沼ら¹⁵⁾は、薬局を対象に行った調査で、8割以上の薬局では、医薬品と健康食品との相互作用について勉強会などの組織的な取り組みは行われておらず、調剤時の健康食品に関し確認を行っていない薬局が約3割あったと報告している。さらに、濃沼ら¹⁵⁾は、トクホと医薬品との相互作用について、約半分の薬局が注意をしていないと報告している。野田ら¹⁶⁾は、患者および薬剤師を対象としたアンケート調査を行い、患者の約50%は薬剤師にサプリメント類の安全性や効果についての情報提供を望んでいるものの、実際

には薬剤師が来局患者の疑問に答えている例は7.3%にしかすぎなかったこと、また、薬剤師のうち67.5%の薬剤師は自身がサプリメント類の情報提供者として来局患者に期待されていると認識しているものの、サプリメント類の情報収集に積極的に取り組んでいる薬剤師は約30%であること、さらに、その情報内容もインターネット上の情報に頼っていることを報告している。さらに、平成25年2月28日付の厚生労働省厚生労働省医薬食品局総務課長依頼¹⁷⁾において、日本薬剤師会をはじめとした、医薬関連団体に対し、医薬品と健康食品の相互作用等について、患者への注意喚起の依頼があったことから、薬剤師が患者に対する健康補助食品の情報提供不足が考えられる。

今回の調査対象が過去1年以上当該店舗に定期的に来局し、生活習慣病に対する治療薬を服用している患者を対象に調査を行ったことを考えると、調査項目の多くは、薬剤服用歴管理指導料の算定要件であることから、既に薬局が把握しておくべき患者情報であると思われる。しかし、調査の結果より、全体の約7割の患者が薬剤師による介入が必要と判断されるに至ったことから、日常業務の中で、患者を長時間拘束し、薬剤服用歴管理指導料の算定要件の全ての項目について詳細な聞き取りを行うことは容易ではなく、聞き漏らしが少なくない可能性が考えられた。

ブラウンバッグ運動は、保険薬局にとって特別な活動ではなく、薬剤服用歴管理指導の延長線上にあるものと考えられる。つまり、患者から他科受診の有無、併用薬の有無、市販薬や健康補助食品の使用状況の聞き取り、さらに必要に応じて薬剤を確認することで状態を把握し、適切かつ安全な薬物治療に貢献することは薬剤師本来の役割であると思われる。

しかし、全患者を対象にブラウンバッグ運動を継続的に実施することは薬剤師、患者双方の負担を考慮すると現実的ではなく、今回のように事前に聞き取り調査を行い、介入が必要と判断される患者だけを対象にブラウンバッグ運動を実施することで、薬

剤師、患者双方の負担が軽減でき、かつ、日常業務の1つとして継続的に実施できるのではないかと思われた。

以上の結果から、薬剤師は患者の来局時に、積極的に健康補助食品の使用の有無を確認し、その適切な使用方法や、健康におよぼす可能性についての情報提供を行うと共に、必要に応じて、患者が所有するすべての医療用医薬品および市販薬などの点検など、よりきめ細やかな対応を行うことで、医療用医薬品および市販薬などの適正使用に寄与することができると思われた。

参考文献

- 1) 成井浩二, 末次大作, 渡辺勤三.改正薬事法施行以前における一般用医薬品とセルフメディケーションに関する一般消費者の意識調査.医療薬学 2010 ; 36 (4) : 240-251.
- 2) 朝日新聞東京本社広告局.OTC 医薬品 - OTC 医薬品の進歩で可能性が広がるこれからのセルフメディケーション - 集計結果報告書.2011 年 7 月.
- 3) 学校法人兵庫医科大学 内科学肝・胆・脾科.内閣府食品安全委員会平成 17 年度食品安全確保総合調査 健康食品等による健康被害の予備的調査報告書.平成 18 年 3 月.
- 4) 松井健一, 五艘有紀子, 中川圭子, 他. 健康食品摂取後に warfarin の作用が弱まり大腿動脈塞栓症を発症した僧帽弁狭窄症の 1 例. 心臓 2001 ; 33 (6) : 525-528.
- 5) 菅谷量俊, 平野公晟, 福生吉裕. ワルファリン投与患者のプロポリス服用により凝固異常を認めた 1 例. 日本未病システム学会雑誌 2001 ; 7(1):111-113.
- 6) Alan Nathan, Larry Goodyer, Anne Lovejoy and Aly Rashid, 'Brown bag' medication reviews as a means of optimizing patients' use of medication and of identifying potential clinical problems. Family Practice 1999 ; 16 (3) : 278-282.
- 7) 赤沢 学, 野村 香織.英国における地域薬剤師の高度業務から学ブラウンバッグ運動の新しい方向性—リスクコミュニケーションへの応用—. 医薬品情報学 2012 ; 14 (2) : 69-74.
- 8) 赤沢 学, ブラウンバッグでお薬チェック -広島での取り組みを中心に-. 医療薬学フォーラム 2010/第 18 回クリニカルファーマシーシンポジウム.平成 22 年 7 月 10 日-11 日.
- 9) 市川 薫, 大西 保, 金澤 幸江, 他.ブラウンバッグ運動でお薬チェック 薬局薬剤師による服用薬の包括的な併用実態調査, 日本薬学会第 131 年会, 2011 年 3 月.
- 10) 瀧野 奈緒子, 佐藤 芳憲, 岸端 純子, 他. ブラウンバッグ運動によるサプリメントや OTC 薬を含む総合的な服薬指導と薬局の役割, 日本薬剤師会学術大会.2012 年 10 月
- 11) 朝比奈 泰子, 堀 里子, 澤田 康文.「健康食品」の意味と安全性についての患者, 医師, 薬剤師の認識, YAKUGAKU ZASSHI 2010 ; 130 (7) : 961-969.
- 12) 村井 淳志, 松本 光弘.老年科外来患者の他科受診と多剤服用の実態.日本老年医学会雑誌 1993 ; 30 (3), 208-211.
- 13) 本間 秀彰, 橋本 義人, 他.調剤併設ドラッグストア来局患者における健康食品の使用実態に関する基礎的調査, 医療薬学 2007 ; 33 (5) : 457-462 .
- 14) 岩尾 一生, 小林 道也, 及川 孝司, 他.糖尿病外来患者における健康食品の使用実態調査(第 1 報)-健康食品に対する患者意識と利用状況-.医療薬学 2008 ; 34 (2) : 112-117.
- 15) 濃沼 政美, 屋代 詠子, 亀井 美和子, 他.薬局における健康食品の取扱い状況および調剤業務との関連性について.医療薬学 2005 ; 31 (11), 936-942.
- 16) 野田 敏宏, 新敷 祐士, 安西 恵子, 他.薬剤師によるサプリメント説明における来局患者の

期待と説明実態との間の大きなギャップ.日本
プライマリ・ケア連合学会誌 2013 ; 36
(2) : 93-98.

- 17) 平成 25 年 2 月 28 日, 薬食総発 0228 第 2 号,
厚生労働省医薬食品局総務課長, 医薬品と健
康食品の相互作用に対する注意喚起等につい
て.

Trial for a sustainable brown bag medication review at health insurance-covered pharmacies

—Identifying patients who require intervention by a pharmacist by means of a questionnaire—

Arisa Miki¹⁾, Takashi Hatae^{1)*}, Yuka Hasegawa¹⁾, Hanako Tsuji¹⁾, Junpei Ueno¹⁾, Motoko Nakagawa²⁾, Risa Yonetani²⁾, Kana Nakamura²⁾, Naoyuki Tamura²⁾, Kaoru Sonoda²⁾, Nobuko Inoue²⁾, Naoko Teduka²⁾, Akihito Yamamoto²⁾, Miharu Sagawa²⁾, Hiromi Shimakawa²⁾, Harunori Takeshita¹⁾, Yoshihiko Tauchi¹⁾ and Tsuneo Hamaguchi¹⁾

1) * Educational center for clinical pharmacy, Kobe Pharmaceutical University

2) Nakagawa Pharmacy

1)* 4-19-1, Motoyamakita-machi, Higashinada-ku, Kobe, 658-8558, Japan

2) 537-2, Hirano, Kakogawa-cho, Kakogawa, 675-0063, Japan

Abstract

We created a questionnaire and conducted interviews to identify patients who required inspection of all their prescribed medications and over-the-counter drugs to establish a sustainable brown bag medication review at health insurance-covered pharmacies.

Our survey revealed that approximately 60% of patients being prescribed medication by other hospitals and approximately 70% of patients taking a combination of over-the-counter drugs required intervention by a pharmacist. Conversely, almost all patients taking dietary supplements in combination required intervention.

Consequently, we determined that 70% of all patients surveyed required intervention by a pharmacist.

By having pharmacists actively check whether patients who visit pharmacies are using dietary supplements, information on the proper use of these supplements and their potential effects on health will be provided. Additionally, pharmacists will inform patients on the proper use of prescribed medication and over-the-counter drugs by providing more attentive support as needed by inspecting all prescribed medications and over-the-counter drugs taken by patients.

Key Words: the Brown Bag Program, questionnaire, community pharmacy

Contact information : Takashi Hatae, Educational center for clinical pharmacy, Kobe Pharmaceutical University, 4-19-1, Motoyamakita-machi, Higashinada-ku, Kobe, 658-8558, Japan